

神奈川県環境農政局長賞

「温かいごはんとぬくもり」

秦野市立渋沢中学校

3年 市野 凜音

今年の七月のはじめ、鹿児島で大雨が降りました。その大雨はたった一日で七月分の雨が降るというすさまじい量の雨でした。ニュースでは、沢山の木が倒れて流れていたり、家の中に水が入って物が落ちていてぐちゃぐちゃになっている映像を見ました。私はとても怖くなってももの凄く心配な気持ちになりました。

なぜ心配になったのかというと、私の祖父と祖母は鹿児島に住んでいて、まさにニュースで流れている場所だったからです。とても驚いて心配になったと同時に自分が最初に思ったことは、二人はちゃんと温かいごはんを食べられているのか、でした。それがすごく気になりました。母が連絡をして、次の日に無事だということが分かって安心しました。けれど、私の中の怖い記憶がよみがえってきました。

それは八年前の三月十一日のことです。私の兄が現在の私と同じ中学三年生の卒業間近で、兄の高校の入学説明会に行った時に、東日本大震災が起きました。私はまだ幼稚園生で小さかったので、母と兄と一緒に歩いて行きました。そこで地震にあい電車が止まって、家に帰れなくなってしまい、一晩その高校で過ごすことになりました。

沢山の人が同じ様に家に帰れずにいました。高校の先生達が私たちに水と毛布と缶パンを配ってくれました。夜になり毛布にくるまって、お腹がすいて、缶パンを食べてみたけれど、小さい私には缶パンは硬くて食べづらかったです。それですごく寂しくなって、心細くて、早く家に帰って温かいごはんが食べたいなど泣きそうになったのを覚えています。

あの時どうしても食べられなかった冷めたごはんを思い出し、今でも毎年起こる災害の時のごはんはどんなものだろうと気になり、家族と話してみると母が、

「被災している人は温かいごはんがとっても食べたいらしいよ。あの時の私達と同じ気持ちなんだろうね。」

たった一晩だったけれど、あんなに寂しい気持ちになったのに、ずっと避難している人達はどれくらいつらくて大変な思いをしているんだろう。みんな冷えたごはんでなくて温かいご飯を食べたいだろうと思いました。

家のクローゼットにしまつてある災害袋を見てみると、最近では発熱剤やアルファ化米という非常食があるということが分かりました。やはり温かいごはんは必要なのです。

地震の時の記憶は、心細さと共に冷えた食べ物を思い出します。不安な気持ちしが食べ物への気持ちに影響して余計に温かい物を食べたいと思わせるのかもしれない。ごはんに対して思う温かさとは、単に温度だけではなくてぬくもりや心の安心を表すと思います。

私のごはんの想像図は、炊き立てのホカホカのお米とごはんが置かれています。そこには家族の笑顔があつて、賑やかな雰囲気と食べながらおしゃべりしている楽しいイメージばかりが頭に浮かびます。その楽しい記憶は安心感と温かいご飯がくっついているのです。

温かいご飯を通じて感じられる温度は、心の温かさが合わさっている事が何よりも大切だと思います。

私が今まで育ってきた、記憶の中のごはんにはいつも、家族のぬくもりや楽しい思い出がつながっています。この気持ちはきつとみんなも同じく持っているものだと思います。昔から変わらない大切な温かさです。

自分もいつか大人になって家族を持つと思います。温かいごはんから生まれる楽しい気持ちを、大事な人達と分け合いたいです。そして安心感やぬくもりを、つないでいけたら良いなと思います。